

## わが青春は、何か！

青森県 前田孝藏

### 父の死

私は、大正四（一九一五）年七月三日に青森県南津軽郡野沢村の農家の長男として生まれた。弟妹四人が次々と生まれたが、貧乏人の子たくさんとはそのころの小作人の代名詞でもあった。我が家はそれとおりで、いつも貧乏から足を洗えなかつた。

小作人と地主の関係は、支配者である金持ちと貧乏人の関係であつた。なぜならば田を地主から借りると、収穫時には借地料をお金で払うのではなく、収穫米の約三分の一を地主への年貢米として地主に納めるのである。残つた約三分の二の米から、その年に必要とする一家の食米を差し引き、残りを現金化するのがある。小作人が地主から借りるのは、せいぜい五反歩か六反歩ぐらいである。いつの年でも、春から夏にか

けては現金が無くなるので、どこの家でも、縄をなつてむしろを織り、それを売つて生活費に充てていた。

このころには、まだ電灯がきていないので、薄暗いランプの明かりでこの夜なべ仕事をしていたが、このランプの掃除は子供の仕事になっていた。貧乏人の家では、畳の部屋は無く全部板張りであつて、この板張りを毎日ぞうきん掛けするのも子供の役目であつた。

こんな日常生活の中でも、私たちは山や川でよく遊んだものだった。特に、私は魚捕りが好きだったので、よく近所の川に潜つては、蟹穴へ手を入れて蟹捕りをしていたが、蟹に手を挟まれたときの痛みは今でも覚えてゐる。もちろん釣竿などは、お金が無いので自分で作つた物を使つていた。

父は、農業をしながら内職として桶造りをしていた。桶屋は近くの村々にはいなかったもので、仕事の切れ目がなかつたが、支払い現金収入のある秋であつたので、母の口から出る言葉はいつもいつもお金のことばかりであつた。酒好きの父は毎晩、晩酌をしていたので、私が毎日、四合瓶と通帳を持って酒屋に買い

に行つたものだった。酒好きの父には、飲み仲間がい  
ろいろといた。その一人は、母のすぐ下の妹の亭主  
で、大工をしている福山といい、もう一人は、すぐ近  
所にいた自作農の与三郎という人だった。大抵はどち  
らかの家で飲んでいたが、ぐでん、ぐでんになるほど  
に酔うと、必ず喧嘩になつてくる。するとその中の一  
人が仲裁に入つてくるが、仲裁をしているうちに、三  
人とも酔いつぶれてしまふのが通常だった。

また、父は地主が嫌いだった。地主の子供は、夏休  
みになるとピカピカの中学校や女学校の制服を着て村  
中を歩いているので、それを見ては不快な顔をしてい  
た。父は勉強が好きだったので、高等科のあつた黒石  
町の学校まで、自転車で四十分もかかる道を毎日通つ  
たとのことだった。

父は私を、自分ができなかった上級の学校への進学  
をさせることを考えていて、卒業したら確実に月給が  
もらえる師範学校へ行くことを勧めた。私は、高等科  
二年生のときまで受験勉強らしい勉強はしていなかつ  
た。父に言われてから一生懸命に受験勉強に励んだ結

果、郡内ではこの年の合格者は一人だけという関門を  
突破した。入学試験の倍率は、約十倍であった。父は  
酒を飲むたびに、「貧乏人でも上の学校には行けるん  
だ。師範学校は、金があればだれでも入学できる中学  
校なんかとは違うんだ」と、だれかれともなく言つて  
いた。よほど嬉しかったのだろう。

そんな父が、私が師範学校に入学した年の、秋雨が  
冷たく降る十一月のある日に、青森県立病院で胃癌で  
死んでしまった。私は、もう学生生活を続けることは  
できそうにもないと一瞬思った。父が危篤になつた  
ときには学校の寮にいたが、夜中に入院先の病院から  
「父の病状が急変した」という電話を受けた。私は、  
父が一日一日と日がたつにつれて食欲が無くなってき  
たので、あまり長くはもたないだろうと、この日の来  
ることは覚悟していたが、こんなにも早いとは思ひも  
よらなかつた。

この夜は、十一月の冷雨が深々と降り続けていて、  
人通りもほとんど途絶えていた。下駄ばきにマントを  
羽織つて、雨にぬれながら病院に急いだ。病室には、

青森市内にいる叔父と母だけだった。父はもう口もきけなかった。私が顔をのぞき込み手を握ったとたんに、父は薄目を開けて何かを言うように口を動かしたが、それっきり呼吸が止まってしまった。私が駆け付けて来るのを待っていて、「お前！　せっかく学校に入っただから、絶対に勉強を続けるよ！」と、言いたかったに違いないと思った。次々と親戚の人が駆け付けてきたが、だれも死に目には間に合わなかった。皆が私を励ましてくれた。

この夜、冷雨の中をタクシーで故郷の我が家に戻った。私は、「父の病気は、毎日の深酒によるものだ」と思い、「自分は、絶対に酒は飲まんぞ！」と心に誓った。

叔父が父の遺志を継いで、卒業まで私を何とか支えてくれることになった。それでも私は、学費を得ることに必死で勉強どころではなかった。制服と制帽は、入学するときに新調したのを五年間着用した。靴は、母の弟が靴屋で、そこから助けてもらったので幸いだった。卒業のころになると、さすがに制服もぼろぼ

ろになったので、せめて卒業式だけでもちゃんとした服装でとの思いから、町の質屋から借り出して着た。せめてこの日まで、父が生きていてくれたならばという思いで、胸がつまるような気持ちであった。

#### 教師としての出発

昭和十（一九三五）年三月に、苦学をしながらの師範学校生活を、どうにか無事に終えることができた。そして、その年の九月一日から郷里の家に近い、正規の尋常高等小学校に、新卒の教師として希望と抱負を持って勤めることとなった。小学校六学級、高等科二学級が開設されていた。私の就職を一番に喜んでくれたのは、もちろん母であった。米一俵七円、そば一杯二十銭という低い物価の時代ではあるが、教員としての初任給は四十三円だった。しかし、その日その日の日銭にも事欠くような生活をしていたので、母もこれで少しはお金の苦勞が軽減されるであろうと思うと、私も嬉しかった。毎月の四十三円の月給の中から、母に三十円を渡した。一日平均一円の生活だったが、当時の一円は、一般の平均的な労働賃金であった。学校

の生徒はほとんどが農家の子供たちで、それも自作農家はごく数えるほどで、大部分の家庭は小作の貧乏農家で、私の家と同じくその日その日のお金にも事欠く状態にあった。

私は、五年生の男女共学組を担当した。当時はまだ着物で通学している者が多く、私の小学生時代とあまり変わっていなかった。男の生徒の体には、ほとんど虱がたかっていた。また、女の生徒の髪にも密生していた。こんなことは、当時の農村の子供にとっても普通のこと、だれも気にはしていない状態であった。また、朝は早く登校をしてきた生徒から順番に、トラホーム治療のための洗眼を励行していた。私と、四年生の受け持ちの代用教員であった竹浪先生の二人で、「はい！ 次」と言いながら、一人一人をつかまえては洗眼した。当時は虱と同様に、ほとんどの生徒がトラホームにかかっていた。家庭内で不潔な日常生活をしていたからだ。これを何とか治していくことが、当時の農村の学校の大きな課題であった。しかし、子供たちは、衛生に対しての関心はあまり持た

いなくて、ほとんど無頓着であったが、それだけに強くたくましい面も大であった。

日本を中心にした国際情勢は、目まぐるしく変化をきたし、東亜の動向は混んとしてきて、国内でもいつ大戦争が起ころうかもしれないという空気がみざぎつていて、国民は不安な日々を送っていたが、東北地方の農村は、相変わらずの貧しい生活を続けていた。

小作農の家の二男、三男は、自分で耕作できる土地も無く、地主の家に雇われて、馬や牛のごとくに働かされるか、または、都会に出て労働者として生きていく方法しか生活していく道はなかった。地主に雇われた小作人は、一年契約、二年契約、長くて三年契約などといって、年数で体をしばられていた。いくら働いても、一年に米にして五俵から十俵ぐらいの賃金しか払われなかった。このように地主に身売りすること、津軽地方では「借れ子」と呼んでいた。

竹浪先生は、私と一緒に教師に採用された代用教員であったが、歌人であり詩人でもあった。教室では生徒に自由詩を作らせたり、日常の生活についてのつづ

り方を書かせたりしていて、生徒の信望も厚かった。

先生は隣町に下宿していたが、毎晩その下宿には、若者や詩や歌を通じての人々が入り出していたそうだ。たくさんの詩歌のなかには、そのころの小学校の生徒の日常生活を端的に表現したものも多かったが、先生はそれをよくプリントして、私にも読ませてくれた。その中には、今でも私の手元に残っているものがあるのです、当時の世相をしのんで記してみた。

・新聞社から学校に配られたバリカンの切れ味のよさにスイカ頭がいくつもできる

・弁当を持って来ない児童だ　昼休みは体操場の隅で黙って鞆たづをついている

・机を後ろへよせれば教室は広い作業場だ  
児童らはくるま座になって縄なわなっている

・絵図面に書いてもらった常欠児童の

どの家も手ぬり壁の家笹ぶきの家

・人間の先祖は猿である実証をここでも見た

児童ら皆松の木に登り騒いでいる

・一人ばかりか三人ほども連れてくる

農繁期になれば子守児童でにぎわう教室

・飲送の旗幾本も風にひるがえり

兵士は今児童らに送られて村を発つ

三月になったある朝のこと、いつものとおりの朝礼が終わったあとで、特高警察の人たちが来て、竹浪先生を連行して行った。事情が飲み込めないまま、校長先生も私たち教職員も様子を見ていた生徒たちも、ただ呆然として立ちすくんでいた。

そのうちに落ち着きを取り戻して考えているうちに、今まで詩やつづり方などで共に語り、生徒の作った詩歌と一緒にあって評価し合っていた私も、そのうちに特高警察に連行されるかもしれないという不安にさいなまれて、一日中落ち着かない日がしばらく続いていた。

海兵团に入団

落ち着かない日々を過ごしているうちに、月日は容赦なくたって、私は二十一歳になって徴兵検査を受け、甲種合格になった。海軍にあこがれていた私は、同僚四人と一緒に短期現役兵を志願して横須賀海兵团

に入団した。

短期現役兵は五カ月間服務し、海軍三等兵曹に任命されて除隊する制度であったので、入団したその日から毎日毎日激しい訓練に明け暮れた。入団する前までは、陸軍と比べれば海軍は楽だろうと思っていたが、入団してみてもそれは全く間違っていたことが身に染みて分かり後悔したが、それはあとの祭りだった。

薄明に響き渡る起床ラップと同時に、「総員起し！」「総員、釣り床納め！」の号令が矢継ぎ早にかり、自分のハンモックを自分でくくり付けて釣り床へ一目散に持って行く。遅くなると先輩から怒鳴られ、全く競技のようでも忙しい毎朝だった。それが済むと、続いて点呼、遙拝式、体操、掃除、それが終わってやっと朝食、そして朝食が終わると午前七時から午後四時まで、びっちり学習と術科で鍛えられた。そんな猛訓練の毎日が二カ月間も続いた。海兵団での陸上訓練が終わると、休む暇も無く今度は乗艦しての海上訓練となる。私は戦艦「榛名」に配乗となった。

横須賀軍港から、特務艦「知床」に乗艦して、佐世

保軍港に向かった。その間にも、艦内でいろいろと訓練が続けられた。

佐世保軍港内に碇泊中の榛名にやっと乗艦した。初めて見る戦艦に胸を躍らせたが、その巨大な威容には肝をつぶしてしまったものだ。

榛名での私の配置された部署は、砲術科で三十六センチ主砲の砲塔内にある照準器の係であった。望遠レンズで目標をとらえて照準するのだが、照準の精度のいかんによって、目標への着弾がかなり変わってくるので、随分気をつかって大変だった。

海軍生活は、睡眠時間以外はすべて訓練に明け暮れた。特に、七月下旬ごろに台湾沖で実施された艦隊の大演習は、それこそ文字通りの「月月火水木金」に、更にその上夜間演習も加わると、それこそ二十四時間ぶっ通しとなり、仮眠もろくにできなくなっ、人間としての体力、気力の極限に達してしまっていた。これを克服しないと、海軍軍人として一人前には扱われなかった。

この大演習が終了して、艦隊は千葉県館山港に入

港した。ここで私たち短期現役兵は、「海軍三等兵曹に任命する」という辞令をもらい、今までの水兵服から、錨のついた七つボタンの海曹服に着替えて、晴れやかな面持ちで艦をおりて、それぞれの故郷に帰郷した。私たちは、教育者として次の時代の若者に軍人精神を伝えるために、海軍のすべての艦船や航空機などにも体験乗艦、体験搭乗をした。

榛名での乗艦勤務中に、日本国内の軍港、要港はもとより、遠く台湾、アモイの港にも入って、バナナ、パイナップル、スイカなど、当時青森の田舎などでは食べることはもちろん、見ることもできない物を食べたり、外国の珍しい風景などを見たり、外国人から接待を受けたりした。訓練は厳しかったが陸軍に行ったのではこんな経験はできないと、海軍に入ったことを後悔しなかった。

除隊をした私は、すぐに以前の学校に復職して、再び貧しい農村の子供を相手に、教師としての活動を始めた。

教師として満州へ

昭和十四年三月、ちょうど卒業式の日、青森県庁から一通の辞令が私の手元に届けられた。かねがね希望を出していた、「満州国在滿教務部への出向を命ずる」という内容であった。直ちに渡滿のための準備を開始して、送別会を催してもらう時間的余裕も無く早々に出立した。携行した荷物はトランク一個に布団袋一個、という身軽な旅立ちの姿だった。新潟から船で朝鮮半島の清津に行き、そこから満州国の国境を越えた。初めて見る大陸は雄大であった。赴任先の遼陽駅で降り満州の第一歩をしるした。駅前には洋車やんしやうや、馬車まぢやが何台もあって客呼びをしていたが、私は青森を出立するときに、友人から教えられたとおりに、「不要ぶやう」「不要！」を連呼した。友人が、「初めてのの人と見ると、どこに連れて行かれるか分からないから、十分に注意をするように」と言っていたのを思い出した。

遼陽小学校は、駅前通りを約五百メートルほど直進した所のロータリーを右折した所にあった。付近は全

部日本人街で、立派な公園に囲まれた、環境のよい所であった。私と同じように内地の学校から出向してきた先生が幾人かいたので心強かった。この学校は、一学年が三学級編成であって、私は一年青組を担任した。赤組は重松先生という女教師で、黄組は野間先生と、一年生の担任は全部内地からの出向組であった。

私は、学校の向かい側にあった日本人の経営する、「河内屋」という酒屋の二階に、これも初めてここに赴任してきた、宮崎県出身の安藤先生、埼玉県出身の橋本先生の三人で下宿することとなった。三人で酒を飲むと必ずのように、だれが言い出すともなく「おい、城裏去ちんりちゆい！」と言うと、すぐに馬車で城内に行った。城内には「ミス遼陽」という日本料理のカフェがあった、日本から来た若い女給がいた。飲むために酒屋に下宿したようなものだったが、父が死んだときに誓ったことは忘れなかった。

秋になったところに、ふとしたことから日本人街に住んでいた広島県出身の一家と知り合ったが、その家の母親が私のことを大変に気に入る、どこでどのような

手を回したのか知らないが、校長先生が仲人となってその家の長女と結婚することになった。

私の担任の青組に、当時満州国政府の高級幹部であった孫基昌という人の孫が在籍していたが、日本語が分からないので、私は孫君に日本語の特別教育をしていた。家庭教師のような形だったので、教えるたびに孫家から迎えが来ていたが、そのうちに校長先生から、いっそのこと孫家から学校に通ったらとも言われたが、私はそれを断り続けていた。

この孫家には、孫君の姉が一人いたが、二十歳ぐらいの典型的な中国美人であった。日本に留学した経験もあるもので、日本語も堪能であった。孫家を訪れるたびに、城内の中国料理店に招待されてごちそうになっていた。私が結婚してから聞いた話によると、私と孫君の姉とを結婚させることによって、日本と満州国との友好親善の証にすることができるということで、校長先生はもちろんのこと、遼陽市長までもが動いたということだった。私も、孫家に出入りしているうちにそんな気配を感じていたので、孫家から学校に通った



らという話も断り続けたのだった。

遼陽小学校に、ちょうど一年間勤務した、昭和十五年四月に、熱河省の承德尋常高等小学校に転任させられた。もしも孫家の姉と結婚していたならば、転任はなかったという事は事実である。

熱河省は万里の長城に近く、いまだ治安も悪く、常時八路军と対峙しているような地域であった。昭和八年一月から五月にかけて日本軍による熱河作戦が行われて、当時の張学良軍を長城線以南に封じ込めて、満州国の防衛線を確保する目的を達成していたが、この作戦には我が郷土の弘前の第八師団が出勤して活躍し、私たち若い者の血肉を沸かしたものだ。

私は、妻を連れて赴任しようとしたが、妻の母親が猛烈に反対した。「あんな危険な所に、うちの娘をやるわけにはいかない。どうしても連れていくとあれば、娘を引き取る！」と、じかに言い渡された。しかし妻は、「どうあってもついていく」と自分の意志を曲げなかった。

いよいよ出発の朝、遼陽駅を発ったが、母親だけは

見送ってくれなかった。約二十時間もの長い列車の旅であった。列車が進むにしたがって、あの満州特有の大広原も見られなくなって、熱河省に入ると峨峨たる山岳が、車窓にせまるような地勢になってきた。やっと承徳の駅に着いて列車から降りた。承徳は、街の周囲は山岳に取り囲まれていて、まるで孤立してしまっているような街だった。その反面、風光明媚で温暖な気候風土であった。かつて清朝の代々の皇帝が別荘地としていただけのことはあった。その名残りとして、ラマ廟や避暑山荘があった。学校の宿舍がないので、満人の家を借りて住んだが、何度となく引越しをした。住宅事情では、いささかがっかりしたものだ。

学校では五年生を担当した。私の組に承德街副街長の有田利一氏の長女の道子がいたが、我が家は有田家と同じ路地に住んでいたのも、いつも入浴や食事などの接待を受けていた。昭和十五年の年も押し詰まった十二月末日に長女が生まれたが、道子は長女の面倒をよくみてくれた。

翌年の十二月八日には大東亜戦争が始まり、承德街でも軍艦マーチに乗って輝かしい戦果が伝えられて、街中で「万歳！ 万歳！」の歓呼の音が響き渡っていた。当時、特に外地にいた日本人は一樣に、皇軍の強さは神の国の軍隊であるからだという誇りを持っていた。毎日のように八路軍の討伐があつて、捕虜になつた者は離宮内に駐屯している部隊に連行されていた。「五族協和」は名目だけで、「支那人」と言つたり「チャンコロ」と言つたりして、下等国民として取り扱つた。朝鮮人も日本人とは全く差別をした扱いで、あごで使つていた。

昭和十八年九月一日付で、鞍山<sup>アンザン</sup>の富士在満国民学校に転任したが、転任後しばらくしたところに、東洋一と誇つていた昭和製鋼所が、米軍のB29による大空襲で爆撃されて、多数の日本人も犠牲になつた。鞍山で親しくしていたある中国人から、「日本、負けるよ！ 先生、早く日本に帰るがいいよ！」と言われたことがあつた。鞍山にいたのでは、また、いつB29の爆撃に遭つて家族共々死ぬかもしれないと考えると、ここに

いることが非常に苦になつた。最初の任地である遼陽に転任して、妻の実家の人たちと一緒に生活をしようと思ひ、遼陽の学校への転勤を働きかけた。その働きかけが功を奏したのか、しばらくして遼陽郊外にある関東軍の附屬の桜ヶ丘小学校に転任することが決まつた。関東軍のこの部隊は弾薬を製造する部隊で、軍人のほか軍属、工員が大勢いた。私たち教員も軍属の身分になつた。官舎も与えられたが工員宿舎とは全然違つていて、広い庭付きの一戸建ての将校用官舎であつた。市街地から遠く離れているために、日常の生活物資は、軍人の利用する酒保が使えたので安く、何ひとつ不便がなかつた。そのころはまだ配給制でもなく自由に求められ、平和な別天地であつた。

しかし、その平和な別天地にも、じわじわと戦乱の嵐が忍び寄つてきた。戦況が激しくなると、毎日のように小学校の五、六年生が工場の奉仕作業に出るようになった。工員が、根こそぎ動員で戦場に行つてしまふため、人手不足をきたしていたからだつた。昭和十九年の半ばごろから、ソ連軍戦車に対する攻撃用の、

フトン爆雷の製造を開始した。これはソ連軍戦車に対して、タコ壺から爆雷を抱いて突入する特攻隊用の物であった。平和な別天地にも、刻一刻と緊迫した戦況が伝わってくる毎日となってきた。

### 敗戦を迎える

戦況の不利が伝えられていた八月十二日の昼下がりに、工場勤務者とその家族たちは、官舎のある丘の広場に集められた。そこには軍刀を片手に持った尉官級の将校がひどく緊張した表情で立っていた。先任者の大尉が、興奮しながら戦況を説明した後、「皆の中には部外者もいる。軍は部外者の人にまで戦えとは言っていない。しかし、サイパン島やグアム島の戦例もある。玉砕の精神を持って対処しなければならぬ」と、声を大にして叫んだ。その激励の言葉が済むと、用意されていた酒瓶と杯が渡された。私は妻に杯を渡して酒をついだ。真夏の太陽に、丘一面に生えている草も、焦がれたようにしなだれていたのが印象的だった。

その当時、私には、長女、二女、そして生まれたば

かりの長男と三人の子供がいた。それらの幼い子供たちの顔を、代わる代わる見つめていると、知らず知らずのうちに涙がぼろぼろと流れ出していた。五歳と三歳の女の子は、実情はよく分からずに、ただ親が涙を流しているのを見ては、一緒になって泣きじゃくっていた。「己はどうなってもいいから、子供だけは死なせたくない。お前は、子供を連れて逃げられるだけ逃げてくれ！」と妻に言ったが、考え直してみれば、妻一人で三人の幼い子供を連れて、どこへどうして逃げられるのか、とてもできることではなかった。

そのうちに、万一の場合にとカプセル入りの「青酸カリ」が渡された。大尉は軍刀を抜いて、「天皇陛下、万歳！」を唱えた。皆は、それに唱和した。悲壮な空気が、真夏の紺碧の空を覆ってしまった。

八月十五日には、私たちは工場内に集合して、天皇陛下の終戦の玉音放送を聞いた。工場内では、「これは敵の謀略だ！」「日本はどうなるうが、満州ではソ連との戦いが続いているのだ！」とか、「男は、年寄りと子供を残して、皆で戦うのだ！」などと、軍刀組

のような意見が強かった。その日の午後五時に、足腰の立つ男性は全員集合させられた。「半鐘を合図に、残留の家族は小学校の二階に集まって、全員火薬で玉砕する」という伝言板が回ってきた。

しかし、私は「おれたちは部外者なのだ。それに天皇陛下下の終戦の放送をこの耳で聞いた。敵の謀略でもいい。もう戦争をしても大困には勝てない。玉砕などは何の意味も無いのだ」と心に言い聞かせながら、高梁畑の農道を遼陽市に通じる太子河の方向に逃げた。夕陽は大きく赤く地の果てに落ちた。高梁畑から虫の声がする、もう秋なのか、虫たちは何と平和な世界なのだろうかと感傷的になって歩いていった。そのとき、背後の官舎街のあたりから火の手が上がって、時々その火の粉が落ちてきた。太子河を隔てた遼陽市街にも火の手が上がったのが望見された。妻の実家の人たちが無事であるようにと、歩きながら祈った。

私は、この太子河で幾度となく釣りをしていて、河の深淺の場所はよく分かっていたので、夜でも渡ることができた。家族を白塔公園の繁みに残して、実家の

大和通りの様子を見に行った。遼陽市内は、暴動、略奪、放火などで混乱していた。大和通りまで行ったが、住宅の裏口は板戸が打たれて、鉄条網が張り巡らされていた。実家の人たちもどこかに避難したようで、人の気配はしなかった。これでは、また官舎に戻りしれないと覚悟を決めて、再び太子河まで来て、中州の草原に子供を寝かせて夜明けを待った。ここ何日も雨が降らない河は、水たまり程度の水しかなかった。薄明を待って官舎に戻った。官舎のあちこちで、焼け残りの火がくすぶっていた。あとで聞いた話では、青酸カリを飲んで石油をまき散らして一家全員死んだ家や、どうせ死ぬならばと、浴びるだけ酒を飲んで放火して死んだ人もいたそうだ。自殺した者は、玉砕を信じて死んでいったに違いない。しかし実情は違って、玉砕時間ぎりぎりに一人の男が校舎に駆け込んで来て、「青酸カリを捨てろ！ 男たちは帰ってくるぞ。早まったことはするな！ 皆は助かったぞ！」と怒鳴ったそうだ。これがだれであったかは分からないとのことだった。

小学校は焼けることなく無事に残っていたが、休校せざるを得なかった。終戦の年になると、四十五歳以下の男性は全員現地召集になったが、校長先生と私は残されていた。海軍の私では、この広大な大陸では役に立たないと判断されたのかもしれない。私が陸軍であれば、とつくに召集されていたはずである。結果的には、海軍に行ったことが召集逃れとなったのだった。

玉碎を主張したあの大尉たちは、いち早く家族を疎開させ、本人たちも行方知らずとなった。踊らされてあたら命を落とした人たちは犬死で、哀れでならぬ。い。

九月になっても雨が降らず、生きてはいるものの生氣を失って、虚脱状態が続いていた。郊外からは、夜屋なく不気味な銃声が響いていて、いろいろなデマが乱れ飛んでいた。毎日を不安におびえながら過ごした。遼陽の家族は無事であることを確認した。遼陽市内には得体の知れない武装集団がいた。「おれたちは八路军だ！」と言っているが、黒色の便衣を着ていた

ので「黒人」と言っていたが、満人たちは彼らに対して無表情であった。

官舎では自警団を組織し、丘の周囲を有刺鉄線で囲った。幸いに工廠にはこのような資材はいくらでもあった。三八式歩兵銃も火薬もあったので、安心だった。そのためか、この付近の満人部落からの襲撃や略奪はなかった。

満人はソ連兵のことを「大鼻子だしばし子」と言っていたのしつていた。大鼻子は、日本人、満人の区別無く暴行、略奪、強姦をくり返していた。大鼻子が来るという情報が伝わると、部落の女は山の方に逃げ込んだ。日本の女性は頭を丸坊主にしたが、満人の女性はそんなことをしなかった。

そのうちに、工廠にもソ連軍の一個少隊がやってきて、設備を接收した。目ぼしい物はすべて無くなった。マンドリンといわれた自動小銃を、無造作に空に向けて発砲した。軍服は継ぎはぎだらけで、腕時計を両腕にいくつもはめていた。

日がたつにつれて米が一粒も無くなった。米に代わ

る主食としては、高粱か粟であったが、これを得るために売り食いをしたり、街に出てタバコなどの立ち売りをした。

官舎では、奥地からここまで避難してきた開拓団の人と、北方の戦線から下ってきた日本軍の兵士を受け入れることになった。開拓団の女性は、髪を切り真っ黒く日焼けして男女の見境がつかなかった。男も、髪もひげも伸び放題で、両方とも歳も分からなかった。兵隊は、カーキ色のよれよれの軍服に、ズック靴のような物を履いていた。「関東軍百万？ それは全くのたためです。私はアムール河の国境警備隊にいましたが、対岸にはいつの間にか数知れない戦車が集結していて、爆撃と同時にあつという間に戦車を先頭にしたソ連軍が渡河してきた。私たち守備隊は、敵の戦車砲、機関銃、そして爆撃のために壕に入ってへばり着いていたが、いつの間にか壕の中に埋まってしまった。気付いたときは一個少隊の守備隊員のほとんどがいなくなっていた。私の頭越しに戦車が過ぎたという感じだった。一緒に壕を飛び出た四人は、幸いに負傷

もせずに助かった。召集兵などには小銃も渡されなかった。満州国軍は、敵と戦うどころか、てんでに逃げてしまった。私は、ここまで逃れて来る途中で、目を覆いたくなるような惨殺死体や、爆雷を抱いて戦車に体当たりしたが、爆雷が不発でそのまま戦車の下敷になった無残な死体をいくつも見た」と話していた。開拓団の女性も、開拓団での集団自決の様子や避難の途中で、多くの人が飢え死にしたという生々しい話をしていった。

九月下旬になると、国府軍と八路軍との市街戦が始まった。私たち日本人の男性は、そのつど作業に狩り出され、担架で負傷者を応急の病院に運んだり、物を運搬したりした。

#### 引揚げ開始

昭和二十一年七月五日に、引揚げが始まった。私たちは遼陽にいた者は、遼陽駅から無蓋車に乗せられた。無蓋車の周囲にはステッキなどを立てて、そこに炊事用具や背負い袋などを置き、女、子供を中央に座らせて、その周りを男性が取り囲んだ。「親子という者は、

死ぬときも生きるときも一緒で、決して離れてはならぬ」と言つて、子供一人一人の頭をなでた。やがて白塔公園にそびえていた白塔も次第に遠のいて行つた。一体、どこを走っているのかよく分からなかつた。駅でもない所で停車したりしているうちに、不穏な話が伝わってきたりする。葫蘆島から引揚船に乗るという話だが、葫蘆島まで幾日かかるのかは、だれも知らない。途中で襲われて、略奪されたり強姦されたりするので、列車が止まるたびに女性を伏せて息を殺していた。水商売だった人に頼んだこともあつたが、何人かの人は発車に間に合わず、そのままそこに取り残された。

錦西にやつと着いたが、そこから路線が切り替わつたので、もう引き返すことはないだろうという安心感が、だれの口からともなく流れ出た。列車は葫蘆島への丘をゆっくりと走っていた。歌を歌い出す人もいた。私も歌つた。渡満した二十五歳の青春時代に、よく口ずさんだ懐かしい歌である。「森の青葉のかけにきて……」と皆の口から次々と、いろいろな歌が流れ

てきた。

葫蘆島は島ではなかつた。なだらかな丘陵地帯に樹木らしい樹木も無い草原で、なつめの木に小さな実がついていた。にわか造りの手製のテントが、色とりどりに張られていた。満鉄の女子寮だつたという建物は、赤いレンガ造りの外壁だけが残っていて、内部は何も無く破壊されたレンガがごろごろしていた。私たちは、そこを整理して住むこととした。ここでの生活が何日も続いたが、十一日目になってようやく岸壁に徒歩で移動した。暑い暑い日の下での行進だつた。「おお！ 海だ。海が見えるぞ！」と叫んだ。「だが、本当に引揚船が来るのだろうか」と心配する声もあがつた。船が一隻も見当たらない港には、警備兵だけが所在なさそうに立っていた。

しばらくするとどこからともなく「あぁ！ 船だ、船が来るぞ！」という叫び声が響き渡つた。自然に「万歳！ 万歳！」の声流れ、それが大きななどよめきに変わつていった。日本の軍艦ともつかない輸送船のようでもあつたが、船尾には久しぶりに見る鮮やか

な日の丸の旗が掲げられていた。

引揚者に乗せた船は、静かに葫蘆島の岸壁を離れた。もうこの大陸の地を二度と踏むことはないだろう。「もう、二度と来ないぞ!」との思いとともに、改めて今日までの苦しみを思い返し、唇をかみしめた。

警備兵に手を振り、「再見、再見! 謝々、謝々!」と、大声で叫んだ。彼らも手を振って見送ってくれた。

大陸の岸辺は一直線に伸びて、背後の山々との見分けがつかなくなってきた。あの山々の遙か彼方の、承徳の教え子や在留していた同胞はどうなっただろうか、うまく脱出しただろうか、と思いをはせる余裕も少しずつ出てきた。

葫蘆島までの道のりは、あまりにも長く遠かった。やがて、大陸は夕闇の彼方に消えていった。

### 生活再建

三人の孫の顔を見たいと言って、楽しみにして私たちの帰国を待ちわびていた母は、昭和二十年十一月一

日に、孫に会うことなく亡くなっていった。どれだけ私たちの帰りを待ったろうか。妹や弟の口からそれを聞きたびに、自分の親不孝に胸がかきむしられるような思いになった。仏壇の前に三人の孫を座らせ、ただただ涙を流す日が続いた。

引き揚げた年の十二月も押し寄せまったところに、私は職を得て北海道の東静内にある竹細工の工場に、工場長として単身赴任した。厳冬の北海道になぜ行くのかも言われたが、当時の先生の給料は「リンゴ一個の先生」とまで言われたほど低かった。この工場長の給料は、先生の給料の三倍から四倍だった。社長が私の叔母の主人で、やがてはこの会社の後継者にするという条件もあった。まともに信じて赴任したが、次第に月給も遅れがちになり、作業員への支払いも二カ月まじめ、三カ月まじめとなってきた。

私は、こんな会社はやがて倒産すると見切りをつけて、着のみのまま翌年三月に青森に戻った。ちょうど「春の彼岸」の中口であった。ヤミ市場で食事をして焼野原となっていた市内を、何の目的も無く歩いて



ていた。そんなときに、幸運が舞い込んできた。同級生の竹内君と、ひょっこり出会ったのだ。懐かしさでいろいろ今日までのことを話し合った。その彼の努力で、中学校教員に採用されることになった。月俸五百円、宿舍は中学校の物置を改造した。これで再び教員として職に就くことができた。

昭和二十五年には、妻の両親がいる広島の本郷小学校に転任したが、その後、家の事情で再び青森県内の学校に転任した。

教員職を定年退職して自由になった私の心の中に、わだかまっていたのは、「お前の青春は、何だったのか?」「満州国とは、どんな国だったのか?」「なぜ日本人、特に軍部は関東軍を増強して中国大陸まで侵略して、そこで何があったのか?」などの思いである。何とかして中国東北部に旅をして、戦争の遺跡をこの目でこの足で確かめたいと、十年ほど前から中国を一人で歩き続けてきた。中国の青少年と日本の青少年のために、その実態を語り残したい。私は年令に関係なく、生きているうちは、毎年必ずこの旅をすることに

している。

## 光陰赤土に流れて

岩手県 三田 照子

### 一 盧溝橋事件

昭和十二(一九三七)年、私が仙台市のミッションスクールの専門学校に在学していたとき、中国人の少女が音楽科に入学し、私が入っている寮の隣の部屋に住むことになった。彼女は中国語と英語しかできないから、すぐに打ち解けることはできなかったが、日本語が分かるにつれて意志疎通もスムーズになり、明るく愛くるしい性格の彼女は、寮仲間のアイドルになっていた。ところがその年の夏、彼女が突然姿を消した。寮の舎監の先生は、東北大学に在学中の兄が突然寮にきて「緊急事態が起こったので帰国することにになった」とだけ言って、彼女を連れて帰ったと話してくれた。私たちとしてはせっかく親しい仲になったの